万葉歌の魅力をさぐる―⑦

鰻取り食せ

『万葉集』巻十六に収められた家持の歌に次のような歌があります。

石麿に　われ物申す　夏痩に　良しといふ物そ　鰻取り食せ（三八五三）
痩す痩すも　生けらばあらむを　はたやはた　鰻を取ると　川に流るな（三八五四）

右は、吉田連老といへるあり。字を石麿と曰ふ。所謂仁敬の子なり。その老、人と為り身体甚く痩せたり。多く喫飲すれども、形飢饉に似たり。此に因りて大伴宿禰家持の、聊かにこの歌を作りて、戯れ咲ふことを為せり。

左注に家持が痩せた友人を軽くからかったという歌です。少し前の三八四〇から三八四五番歌には、痩せた人、鼻の赤い人、色の黒い人、白い人、腋毛の濃い人を笑う歌、これに応酬した歌がみえます。身体的なマイナスを笑うのは子供じみていますが、貴族世界では当たり前だったのか、『平家物語』「殿上の闇討」にも平忠盛の目を攻撃する歌がみえます。家持が一方的に笑っていますが、三八四〇からの八首には反撃の歌もみえ、皇太子と平群鮪が歌垣で影姫をめぐって悪口を応酬した歌（顕宗記・武烈紀）を彷彿させます。

三八五三番歌は、土用の丑の頃に引かれもする歌なので、多くの方がご存じでしょう。左注は家持がこれら二首を詠んだ事情を説明していますが、吉田連老の反撃の歌は載せていません。編者の権利で、家持は自分への悪口歌は捨てて載せなかったとも、石麿は仁敬の人だったので、応酬の歌を詠まなかったとも想像できますが、どうでしょう。

大山忠作「大伴家持」（当館蔵）

老は「痩せの大食い」だったと書かれていますが、腸の栄養を吸収する力が弱かっただけでなく、仁敬の人、すなわち生真面目な性格ゆえに太れなかったのかもしれません。今は飽食の時代、皆太り気味ですが、節制して痩せている方もあります。古代においては、痩せていることは栄養価の高い食べ物が食べられない境遇にあるとみられかねませんでした。石麿も「飢饉に似たり」といわれています。仏教語でいえば「餓鬼」です。貴族は太った容姿が理想で、平安時代の絵巻などでも貴族の男女はぽっちゃり型に描かれているとおりです。石麿は生来太れなかったために家持に標的にされ、鰻を捕って食えだの、鰻を捕ろうとして川に流されるな、命あっての物種だぞなどとからかわれているのです。

家持は人の身体的欠陥を笑ったりして怪しからぬ奴だというべきかどうか。紀女郎小鹿と交わした贈答歌も掛け合いからの抜粋かと思われますが、いささかふざけた歌の応酬では、彼も小鹿に、「私の摘んだ茅花をあげるから、食べて肥えなさい」（八―一四六〇）とからかわれ、「私はあなたへの恋煩いで、茅花を食べても痩せるばかりです」（八―一四六二）と上手に応えています。何歳ころのことだったのか、家持も実は痩せていたとすると、石麿へのからかいは「目くそ鼻くそを笑う」類になります。すると、これら二首はこうした自虐的な面白みを認めて詠んだ戯歌であったのかもしれないと、思わせる歌にもなります。

（万葉古代学研究所所長　寺川眞知夫）